隠国 KOMORIKU 通信 Vol. 4
The Letters From K.Kayamori in KOMORIKU.
2017.12.16

きっと君は来ない　ひとりきりの・・・　静かな夜・・・

華なりコンサート4「12月の歌～冬の日暮れに～」に寄せて！

「クリスマス・イブ」は山下達郎の大ヒット曲。一定の年齢には定番的な曲なのだけど、少し若い世代にはそれほどでもなく驚いてしまう 自分たちの多感な頃に聴いた曲というのは月日を経ても、その時の風景とともに蘇ってくる。

「冬の歌 ～松下耕の作品から～」では、雪をテーマに3曲を選んだ。松下耕の作品は、華なりコンサートvol,1で集中的に取り上げた。また、今年の夏、岐阜サラマンカホールでおこなわれたEnsemble Kiikaとのジョイントコンサートのオープニングとアンコールにも歌っていて、Clairとしては、大切にしている作曲家と言える。今回の3曲は「華なりコンサートvol.1」の時同様、「合唱のためのエチュード」より選んだ。松下耕は、大学卒業後、本格的に合唱を学ぶためにハンガリーに留学したが、帰国後、その経験をもとにこのエチュードを書いていて、合唱に大切な「ハーモニー」「階名唱（ソルミゼーション）」「旋法」のことなどを踏まえていて、非常に有用だ。同時に音楽的、芸術的にも価値が高く、単なるエチュードではない。「華なりコンサートvol.1」では、張り切ってそのことをお客様にお話しして、「ちょっと専門的だったのではない？」などと後でお声も聞かせていただいて、大いに反省したのだが、アカペラを活動の中心とするClairにとっては大命題なのだ。豊かな響きと豊かな音楽で、この雪をテーマとした「冬の歌」をお届けしたい。

やはりこの時期ならば、**「クリスマスソング&キャロル」**を歌わないわけにはいかないだろう。歌にも歌うにふさわしい時期や場所などもあるのだと思う。でも、ありきたりの「クリスマスソング&キャロル」にしたくないし、ありきたりというか、定番の曲も歌いたいということで、選曲に工夫をしてみた。「Amazing Grace」はクリスマスソングでもキャロルでもないのだが、祈りに満ちた曲。「In dulci jubilo」（歓喜の中で）はバロック音楽の中期に大活躍したドイツ、プレトリウスの作品。そして、「鐘のキャロル」「クリスマス・キャロルメドレー」と続く。「あら野の果てに」「ひいらぎかざろう」「もみの木」の3曲が歌われ、最後は大団円でフィニッシュ！そして、最後にジョン・ラターのアレンジによる「Three Christmas Carols」で前半を締めくくる。ジョン・ラターもClairがつねづね取り上げている作曲家。優しく親しみやすいメロディーは魅力に溢れている。イギリスでよく知られた3曲がうたわれる。

クリスマスにちなんで多様な**「Ave Maria」**を選曲した。Ave Mariaとはキリスト教（特にカトリック教会では、主の祈りと並んで最も頻繁に唱えられる）の聖母マリアへの祈祷のことであり、グレゴリオ聖歌をはじめとして、古今東西の作曲家による作品がある。

アヴェ マリア、恵みに満ちた方、
主はあなたとともにおられます。
あなたは女のうちで祝福され、
ご胎内の御子イエスも祝福されています。
神の母 聖マリア、
私たち罪びとのために、
今も、死を迎える時も、お祈りください。 アーメン。

Arnold von Bruck（c1470-1554）はドイツルネサンスの指導的作曲家。宗教改革のルター派の音楽も多く手がけた。周藤諭（1983-）は声楽家でもあり、バリトン歌手としても活躍している。この曲は「三つのマリアの歌」の第1曲で2014年10月に初演された。Bardos Lajos（1899-1986）はハンガリーの作曲家。コダーイやバルトークのあとを継いで、20世紀のハンガリー音楽を発展させた。Willem Andrisen（1887-1964）はオランダの作曲家。主にピアニストや教育者として活躍したために残されている作品は少ない。弟のヘンドリックも作曲家として活躍した。CacciniのAve Maria「カッチーニのアヴェマリア」として有名な曲。しかしながら、バロック時代の作風とは全く異なり、ロシアのあまり知られない作曲家による作品というのが定説になっている。

最後に **「冬の最後の日暮れに」**と題して冬の歌を！関西新進の作曲家石若雅弥と「知の巨人」と呼ばれた柴田南雄の作品で締めくくる。

石若雅弥の「夕暮」はこの夏の岐阜の演奏会でもEnsemble Kiikaと演奏した。無伴奏女声合唱の初演だったのではなかっただろうか。無伴奏混声合唱版の初演をさせていたき、ぜひ、無伴奏女声版を書いて欲しいとお願いしていたのだ。もう1曲の「雪」は石若雅弥の初期の作品「少女のまなざし」におさめられている。無伴奏女声合唱版が出版された。金子みすゞの詩をみずみずしいまでにえがいている。

そして、「氷雨」「冬の最後の日暮れに」は柴田南雄の「冬の歌」の第1曲と終曲。1994年の作品だ。柴田さんは1996年に亡くなっているので、最晩年の作品の一つと言える。晩年は「追分節考」などのシアターピース作品で合唱に新たな境地を見いだした。優れた作曲家が合唱の作品を多く残してくれたことを本当に幸せに思う。「冬の歌」はシアターピース作品ではないのだが、チャンスオペレーションなど現代的な手法で書かれた作品も含まれている。詩は新美南吉。愛知県半田の人で、「ごん狐」「てぶくろをかいに」などの児童文学でよく知られるが多くの詩や短歌なども残した。29歳の若さで夭折。

多くの作品に向かい合う中でいつも実感するのだが、声楽のみが音楽の中で言葉を伴っているのであり、合唱や声楽アンサンブルのみが言葉を伴い、メロディだけでなく、ハーモニーもつくる音楽なのである。音楽と文学が出会って生まれる音楽とも言えるし、言葉の文化と音楽の文化の融合とも言える。何度音楽に慰められ、言葉に励まされて来たことか。言葉が綾なす音楽の世界の奥深さをお届けできればと強く思っている。